



新田義統功臣録
貳

205
2



新田義統功臣録初輯卷之二

感得奇聞 黒夜失途會舊臣話

追鳥化城接解婦話

光陰の過るに際しての今南朝正平十六年

徳壽九十六歳なりぬ此年月恵仲より従ひ百家村書伐

思ひも素より聰明娶り秀なる生質ありし一覽

百悟も書し解するに常言に以てて文章は

ものなる武事ありし宜哉武技も又化増り共司の門人多き中

も徳壽九十五歳悪きものあり十八般の武藝粗熟得たりし

うは徳壽九と五十歳に常武を競り精定最深く今日も

郊野に往り獵を倣ふと二人揃りて弓箭を佩るふりあふ

小金原より出づる終日狩りしれども奈何して皆得物更もなく
 陽西に傾りし中むあつて家踏み歸らんとする尚時忽二隻の鳥一
 樹の梢上より止るをみる其形野鷄に似て五色斑斕ある雁鳥なり
 五十熊遠より息を著く徳壽丸不戯まき云今日得物なりと
 空せんとすり處に這之隻の鳥を身する我れ也二人されはるま
 得物ありあつてや今甲乙の盟約を定む是をこそ人得たるもの甲
 乙のりなり乙なり其賞罰の甲なる者ハ君乙なるものハ臣となる
 のまじひを做さんといふもこれ徳壽丸微笑して是佳興ありと
 と東村より止るる徳壽丸西の村より止るる五十熊と定め既ち兩人
 拍く是を射んとする處に遠鳥忽然として東西へ飛去る二人も
 まるく東西に別れし是を追ふ徳壽丸の東をけしと發行する一里

餘りし一座の林の下より出づる處に鳥ハ猛この林中より入りし去
 向を多ふ時正天色暮晚烟朦朧として物及さんというべきは
 鳥を得べき術あり一盞茶時站するの心裡想はく吾這鳥哉
 りさるべきは乙の科なり彼ハ臣のすべしをせんとして辱まれ
 りのめしし得るべき方ハ沈思を運るる此屹一計を生じ
 急み林下の枯草を聚腰間より佩ふところの燧をりて早火
 をらめ折し二月の始しる青草のまじり舒き枯州紀事成
 ある北風烈り其の忽火のまじり燧のまじり燧くして四方を
 照らすと恰も白日のごとくなりし林に棲宿する聚鳥皆啼て
 皆火の光け方へ飛強ぐ這時彼ももむあつて翔出するは徳
 壽丸星をこきつる也其喜の佩於其處の畫弓より白羽の箭を著ひ

ふの山をきひきと射すの的をたぐむ羽ふしをてと射通心
るの地上にみよきまきりやがく是を携へ飯らんとすりみ時や二更
の天に月没雲發雨さく降出〜今もく〜人きりし火も急
み消く忍びも辨ぬ黑夜とありし何方か家路がらん〜呆然
としてありは是も斯くもさるべきなれぬがすん人かある方を當め
くともかおも做べしと足は任〜歩も足這小金原〜四方
茫々蕩々としく乱草迷離とあがり烟霧鎖籠く志凄涼き
郊野あれは痛くも白昼も尚怖く〜獨行するその稀なりや
〜とも原来英雄の徳壽丸なれぬ〜もおそろ〜走り
遙か鉦子の声聞ゆる〜是必佛院の在り〜も鉦子は青
を志ぐみたぐり〜果〜深林の裏より一道の火け光隠く〜

山出りみ力を得〜いそぎ逃げきて〜るみ荊棘垣を〜ひきる裡
ふ一軒の草屋あり〜内み仏号を唱へ鉦子をた〜る声は〜れだ
まづ柴門を創〜との敵〜〜酒家へ今日狩り出〜る者なるが
途を過ち此地方へ迷ひま〜り〜一夜の宿りを恵み多ひあん
〜と乞ふ〜裏より年記〜十只星〜おぼ〜き漢子〜も出て徳壽
丸の模様を仔細み看〜〜這裡へ入〜と伴へ〜渾家とお母〜女
子を叩〜有ち〜が此所〜さまを〜〜辨み鉦子〜ち止り爐〜柴
〜〜〜云寒夜さ〜凍み〜らら茲ふ〜の〜湿衣を〜あ
〜へ〜粟餅〜山茶〜〜〜甚難〜郷〜り徳壽丸謝〜極
邊ふ〜〜濕衣〜燃あ〜四方を顧み鹿兒猿兒のた〜ひ
を磬上〜かけ又〜〜〜箭を掛〜〜這家獨戸を〜



做^すあつと^{あつ}とい^いま^ま婦^むの容^{よう}貌^{ぼう}を^をえ^える^るみ^みふ^ふの^の荒^あ布^ふの^の衣^いを^を穿^き髪^{かみ}
 も^も飛^ひ蓮^{れん}の^の衣^いも^もな^なれ^れも^も何^{なに}と^とな^なく^く縁^縁故^こあり^{あり}ぬ^ぬへ^へく^く彷彿^{彷彿}と^と面^面
 條^{りょう}あり^{あり}り^りれ^れは^は公^{こう}裏^り甚^{しん}怪^{かい}し^しも^もあ^あづ^づり^りか^かく^くの家^{の家}廟^{ぼう}を^をえ^える^るみ^み新^{あたら}
 ち^ちる^る人^{ひと}あり^{あり}と^とお^おほ^ほく^く仏^{ぶつ}燈^{とう}の^の光^{くわう}明^{めい}く^く香^{かう}烟^{えん}濃^{のう}じ^じく^く新^{あたら}なる^{なる}神^{かみ}版^{ばん}あり^{あり}
 又^{また}これ^{これ}より^{より}上^{かみ}なる^{なる}處^{ところ}み^み金^{きん}銀^{ぎん}を^をり^りく^く彩^{さい}色^{しき}も^も神^{かみ}主^{しゅ}あり^{あり}こ^こを^を
 着^きる^る武^ぶ衛^{ゑい}義^ぎ興^{きよう}公^{こう}靈^{れい}位^いの^の宗^{そう}あり^{あり}り^りれ^れは^は不^ふ圖^と愕^{がく}然^{ぜん}と^とし^して^て
 これ^{これ}を^を拜^{はい}し^し愁^{しゅう}淚^{るい}數^{すう}行^{かう}を^を下^{くだ}し^し多^たく^くハ^ハ王^{わう}驚^{おどろ}き^き慌^{わう}忙^{ぼう}し^しく^く德^{とく}壽^{じゆ}丸^{わん}
 上^{かみ}席^{せき}み^みす^すく^く也^也棟^{とう}燈^{とう}也^也似^に拜^{はい}く^くく^くく^く言^{こと}卒^{そつ}ふ^ふ也^也似^に武^ぶ
 衛^{ゑい}君^{きん}の^の神^{かみ}を^を拜^{はい}し^し多^たく^くハ^ハ正^{ただし}く^く小^こ衛^{ゑい}内^{ない}德^{とく}壽^{じゆ}君^{きん}も^もハ^ハ在^あり^りす^すや^やと
 同^{どう}德^{とく}壽^{じゆ}丸^{わん}也^也咳^か然^{ぜん}と^とし^しく^く宣^{のたま}は^はく^く吾^{われ}則^{すなは}是^{これ}なり^{なり}汝^{なんぢ}何^{なに}等^{どう}の^の們^{もん}也^也斯^{しか}
 懇^{こん}懇^{こん}の^の礼^{らい}を^を做^{おこな}す^すや^や彼^{かの}漢^{わん}子^こ低^ひ頭^{とう}乎^や身^みし^しく^く云^いふ^ふ小^こ臣^{しん}嚮^{かう}り^り小^こ衛^{ゑい}内^{ない}

み^みく^くち^ちは^はは^はま^まと^とい^いは^はく^くも^も離^り別^{べつ}の^の后^ご年^{ねん}を^を隔^へふ^ふく^く既^{すで}み^み之^之年^{ねん}不^な
 及^{およ}べ^べの^の身^み貌^{ぼう}も^も中^{ちゆう}異^いセ^せも^も故^{ゆゑ}み^み彷彿^{彷彿}と^とし^しく^く多^たく^く無^む礼^{らい}を^を做^{おこな}し^し罪^{つみ}
 け^け謝^{あや}ま^ます^すき^きあ^あし^し小^こ臣^{しん}丁^{てい}も^も家^かの^の世^{せい}臣^{しん}水^{すい}瀬^せ八^{はち}郎^{らう}義^ぎ龍^{りゆう}も^もその^{その}か^から^ら
 故^{ゆゑ}君^{きん}去^さり^りし^しせ^せも^もハ^ハ尚^{なほ}時^{とき}ハ^ハ小^こ臣^{しん}別^{べつ}事^じを^を命^{めい}ら^らせ^せ外^{ほか}に^にみ^み赴^きり^りす^すま^まも
 お^おひ^ひく^く凶^{きゆう}變^{へん}を^を年^{ねん}直^{ちく}み^み去^さり^りし^しの^の津^つみ^み走^{そう}至^しす^すも^も既^{すで}み^み其^{その}後^{のち}は^は其^{その}
 詮^{せん}ま^まん^んあ^あく^く空^{くう}自^じ盡^{じん}せん^{ぜん}と^とす^す處^{ところ}ハ^ハ只^{ただ}看^み一^{ひと}の^の國^{くに}戸^こ一^{ひと}女^{にょ}兒^にを^を捕^{とら}
 へ^へま^まく^く撻^{たつ}責^{せき}あり^{あり}小^こ人^{ひと}を^をえ^える^るみ^みみ^みひ^ひき^き勿^なれ^れ彼^{かの}國^{くに}戸^こを^を斬^{きり}殺^{ころ}し^し
 熟^{じゆく}く^く女^{にょ}兒^にを^をえ^える^るみ^み正^{ただし}み^み足^たり^り身^み九^く郎^{らう}重^{じゆう}孝^{かう}と^と割^わり^り了^{りょう}衫^{しん}襟^{きん}を^をる^る由^{よし}
 兵^{へい}司^し義^ぎ忠^{ちゆう}の^の女^{にょ}兒^に松^{しょう}兒^にや^やも^も心^{こころ}に^に戒^{かい}を^を解^と縁^縁故^こを^を因^より^り此^{この}度^{たび}の^の難^{なん}
 小^こ兵^{へい}司^し丈^{ぢゆう}婦^ふ小^こ衛^{ゑい}内^{ない}を^を誘^い引^ひ奴^に家^かも^も伴^{とも}や^や走^{そう}屋^{おく}に^に路^{みち}途^と敵^{てき}の^の難^{なん}
 不^ふ逢^あは^あし^し了^{りょう}父^{ちち}母^{はは}を^を慰^{なぐさ}め^め一^{ひと}人^{ひと}站^たと^とり^りし^し這^こ惡^{あく}俗^{ぞく}ま^まく^く勾^{かぎ}引^ひ此^{この}地^ち也^也



水瀬へ町
物語の
図

まゝに速まわりの事執つて沈思さるる今更しく自盡するも何の
 做す所あらん則索負生君の去向を捜索す忍家を斃策を
 倣人少を不如と彼女兒を伴う此北ふ来り鴉戸を管生に
 只顧君の去向の影向を捜索且一面子と第九郎夫ら凶變は動
 此の折より其去向をれば是をも捜彼女兒と誓を做さる
 小臣が一臂の力とせんと思ひ再人事のたのまがきハ蜂蟻の如く
 彼女兒此れを冒風病ありあり可憐再昨夕泉下の鬼と成
 果れば彼れを浮命の程憐れ力あり今日喪儀しく彼が冥福
 の為只管公事を管む愁傷の苗時因はらき小衛内由ふぎ
 時見あり思這愁殺を轉日頃の奉悔を遠く我分の致を
 するさんとのそもいづれの所在して兵司いんしと事なるふやと

仔細に説問へ徳壽丸熟く是をせりひさしてハ水瀬八郎五河り
 ちうりうと大故のき兵司再誘は総列再微行り莊浦再會く
 潜居よりし今日五十態と將り出途を過ち来り首より尾り
 至るまゝ微細に説めハ八郎大ふ喜び天明再なりわハ小衛内
 從ひ往く兵司再遭く事を儀まじと雀躍してを待居きり
 放下一頭却説這程五十態彼鳥を退く一里左側再日既再暮
 く上弦の月をゆも波し四方漸くと暗なるをも厭く百様鑽求
 むまも更鳥の去向をまも心中心苦く躊躇するももるも
 雨より出く天色も一圍く忽東西を多し何れもするも
 大果しく想く今日いふは斯不利市なりやわりハ徳壽丸を
 吾れ均しくんさまれハ又怨ふしつらも斯あるも益は不如

家路に帰らんもの心を決し只顧花草を踏つけく舊路を索
 出ても黒夜のしつたれに忽途を多ひ歩腦く心神疲乏人同ん
 も只一軒の家がみあふ荒れ寂しく遠く狼の吠声をいり遠
 月孤火はえりをえるのともく甚凄涼何人の好此亦彼へん原ま
 強勇の五十態少しも怕まも自分勵志足を早め走りぬ極半
 榻仏堂の前み出まじしうハ少く喜んぶま此堂の裡み入り簷下
 み落る枯枝を拵腰間より懸り出は是み火を移し湿衣を
 幹し其影み此地の光景をとりみ足九原地く堂の四面渾
 く古墳連ふ其中み頃日死る人を埋まると見えく新なる
 一杯土のり上み一根の穿堵法を立表み經文および法諱を
 ぬ五十態正を着る内み恠いられ這地低み其微る声く呻くを

耳心中大み恠く想く此地原素怪歎任りくはじごとして
 霄吾疲骨を窺ひ肌裡の微るみ今這人物を捕へ得物を抜乃
 くと勝て手を空くせんとする今這人物を捕へ得物を抜乃
 へ海々切均るべと獨嘆きやのく彼新墳を墮く一個の棺を
 穿得る声這裡み聞へられの堂み唾をのしりいのちる鬼神も
 所れ只一提みせんと蓋をぬくんまはのひらみ年記二八在例
 美親の女兒み白衣を穿みりの黒髪あがく乱眼みあげふ
 微く切りき言んとすまも声きく甚苦しげある光景を見
 く按み相違をなれもま想あや如此嬌嬌く佳人み化く驕
 ても智やれハ耽誤まんきま所くす恠麼開口さあんと静に抱
 堂の裡内み伴ひ火みらり氷を嚙し久漸く精氣けりくも

會不察各惠卷之二



五十熊
暗夜
新墳を墮く

繪本壁紙集卷之二

微言しつゝお家此地の猶戸の妹なる頃日愴しくなりたる小
 一昨眠がごとくぞんく辰の更をまゝも只今夢の醒るが如くめて四
 辺を見まわつて経年する人又権の裡みあれはまりの悲さ
 声を揚んとすれども舌沾息苦きを公子の好意より全骸生
 するを得り今日何日なりや五十態玄今日ハ則二月某の日也
 と答ふとき此婦指握りお家宛しくと日なり君ハ正且是再生
 の恩くなり尚此上の恵も天明もありなりはお家の宅に告ぐ
 ぞんく自分往んとすれども氣力俱に衰歩しかあはじしおほ
 の息が煩きまゝを憑ちるなりと嘆りれは五十態熱く徳摸
 様を著小全く人體母しくさうも悩光景なれば人々展々と甚疑
 惑せし曉天の后事を做られりしと其のゆゑも又展りたりて實

再醒のくちりん然へ這荒廢たる堂再曉天すも有しお家
 寒風堪く病重りてとびと實小成へ無さる時専力助と
 不さるるも今宵のうちに往か家小伴往り實否哉正
 さんと暴に壁を穿壁骨を聚り火把を制足を照彼女兒を脊
 肩方向を向りて往車十餘町し一座の林あり這裡は幽陰
 として火の光より其の女兒指さるる云往すしお家が家なり
 と又は足を遠く走りて見ると果して一軒の荒宅なり此ま
 天色を見り兩歇星移斗轉く既而之更の左側あり火把を
 消く思ふも希ざる黑夜なるを漸く柴門の下に至著れば彼
 女兒を脊よりおらししとくく大姉先みく縁故をとき多し前
 に進はしめ柴門を叩けり裡より八郎が妻燭をり門く支出すは着

黑暗の中身白き衣を穿みどりの鬚髪長く垂るる美観の
 婦人站微声りて妙なるやうに門扉を毎多し奴家りのまき更りて
 其声此せる筈婦人似これハ妻ハ相心ひける事ありて咳然と
 しておしらく正是第婦の寛息世に執署ありて夜中深し未
 だるぢんと身柱邊栗として心中甚騒しくもささぐ八郎
 の妻ぢりハ肝膽さく庸人のぢりぢりぢり公号數遍唱くはら
 賢妹何の執心有りて今此に靈を祈りては命不絶すを寛
 靈を顯す道理も何ん病をぬく絶するハ是天命なり且我
 們貪して之も厚葬深仏供養尚累七卒咲より小祥大祥
 の堂齋追度せんハ仏果をば多く願佛号を唱へ
 歌たりし這時五十態に門外有りて有林有葉の光景を見ん

甚可笑なりハ倡と出くはくはく大姫怪多ハ断たり賢妹ハ更ハ
 寛靈ハあまも甦醒しよりを洒家伴ハ妻多なり縁故ハ裡
 内ハ入く話説へて云ハ妻ハよりハ縁故ハをけるハ容貌勇壯
 なるハ漢子ハねハ甚怪ハ踏踏ハ何りなるハ裡ハ八郎妻
 ハ門際ハはけけははやま居居を怪ハたら出んハ妻ハハ門
 扉を押へて站門外ハ少事と一婦人と立りて先ハ縁故を
 妻ハ聞れハ這般なれとありと説をきハ八郎妻ハ裡ハはけ
 云ハ彼二人を誘入ハ此婦ハ口はくはくあまき隣婦ハ別
 室ハ入まてハいこりさる

君臣奇偶議復讐言話
 惠仲一時遭火禍話

言時五十熊裡五入る着ふ山堂料や徳壽丸席上五端坐
 しくおぼしけれハ愕然としく其縁故を問ふハ徳壽丸
 且驚且喜ひ多し鳥を得たることありし途を多し此家
 なる有材有業を的細説あり得る處の多しを出しし亦多
 五十然言ふ其計策此遙及ぶるを感糸一我拙を慙愧
 一后前朗鳥を追々化城五至懸生の婦を空身得くこふ
 扶まする原委を微細五分説を徳壽丸を徳物了惶怖せ
 する大丈夫の行状を感ト八郎夫婦再交付たす人を夫婦ハ五十
 熊五今宵の恩を謝し重くこれを餐し雀躍ししを京を
 さらり五十熊も熟く夫婦の行状を著るハ徳壽丸を板と地
 五筋五分野たれハ甚異く其所以を問ハ八郎進出く徳壽丸

禁目し云ら後生可畏と當り足下等ごとくあるは年記種
 今我々の大事を話説なりハ他再漏らさるハ徳壽丸を指して
 是を官軍の元帥義貞公の孫君也し我貞公の小衛内なり我
 ハ是新田の世臣水瀬八郎義龍と叫做的あり足下ハ武技の師と
 頼き人ハ吾と同門也し由良兵司義忠と之ハ万丈不當の
 于城なり今宵足下ハ接得る女兒ハ則是我忠ハ女兒なり今
 説く且今宵不思儀再君臣相念しきる言をのへ立く宗廟我
 幼き足下我々の新田の眷属する證ありと義興公の神王を
 亦り至ハ五十熊大再頼首拜伏して云らく小人不明也今
 日すくも小衛内なり平を不識をく多礼して罪を謝する所也

原來小人外王父の新田家の小臣なるは常母の諺る小軍の這船
 の縁由のりる人小且今日て君と戯あつりも乙ききんとのと臣と
 ちりしと誓物きりしが既小相公の甲を得多ひぬれば小人今日より
 臣となりて大馬の勞を做人と赤心を露し誓言をたてて速れば八郎
 大蔵ト足下年少しく斯道理も明なれば後未頼る人小相
 公の意徳と宜くまの徳壽吃声を正しく宣く我不肖なりといへども
 清和の皇徳と累世武臣の長きりし小父祖相龍をひく國難は
 淡命多ひく其業を瘞たり故に洒家復古の志ありと既三年
 あれも力を助べきくあきを恨ふ處小足下如斯好意ありは今日
 より吾臆股とちりて不明を分りてやとつりれば五十態欣然と
 拜て是に應じ遂に君臣の義を結ちり這時八郎喜しく

しく小人私に想つる御の二隻の鳥は正是我門を會し君臣の義
 を締はちりて天翁の行媒も多るや天明早く小相公を送兵司
 母會たや各曉天をてそ待ちまは且説も兵司の徳壽九十九
 態獵も出後日淡りれば飯りまはまは大母恠く苦く惠
 仲の家もや歸まらんと那處も往く聞ゆる其もやうり一と
 惠仲もさき二人相儀して夜を侵し披索れも東西も希き
 がる暗夜なる人小湯くする郊野の裡其處を敵にしきるてもな
 く終夜披索し悩く殆ど神疲勞應も奈何もせんまはあく金原
 此郊心も呆然とて站りて時めちや五更ちりてわたりて東方や
 明み朝鳥頻り鳴渡横雲の晴もまはさく只着面前より之
 の漢子来るあり兵司慌忙走りてこれを着りて徳壽九十九



徳川幕府の御用金



徳川幕府の御用金
往來の主従京師へ
旅中の
馳望
發足

徳川幕府の御用金

然りりれハ大母喜ひとくくの喜をのべく心飯腹子裏はどめく
陪従る漢子を着一着野ひく云らく足下ハ是ハ八郎哥、母の
さやく定まへの彼漢子急母礼を做して云小人則ハ郎たり、這般流
的と兵司大哥あつどもやと兩人互母恙なきを喜ひるが八郎
王の喜び母傍より有りを子母昨夜の光景を微細母話流ハ惠
仲傍母有り足下を父大母驚くくらくさてハ足下等も渾く
新田の貴族かりりるもや小人眼目わりあつり足下を去りて
罪を得り我素東師の産あるが此地方母素岳父の家を嗣
岳父原是新田の小臣ありしが一時の喜ふよりこも躲射の至ふ
を待り母素懐を遠く辞世小人彼が家を嗣は則新田
の臣なり時の至るが故母此事深く隠せしは今時まりて吾

兒小衛内も君臣の義を結ぶる事の存し是應君臣の祖靈の惹
ちむる所あるとと話流り其ハ各奇異の想いを示し是又一臂の賜
を得りりと大母喜びり斯く兵司ハ己の家母名を伴ひ解王
渾家母對しと這般この事よりしと云向あれは女兒をとり得
りりと話流り母渾家も一般に母喜び母雀躍してハ郎五十
慈母厚く感謝し酒肴を出し飲の宴を催しり、這般兵司
進出りりくと如此君臣相會するハ小衛内開運の時至るあり
人今年君既母十の歳より多ひめ母を母我兵を揚ぐ
怨家を驚んと想ひり母儀奈何と云くきと云母惠仲班を出
りりくと小人愚意を以りて今天下の光景を熟思母海内足利
氏の武徳ハ腹まり母似れども素徳をりりて治りり母ありりて只人

心公家の辟政を厭ふ當時足利氏公家を背奮の鎌倉の政も
復たわがくを念是も飯より此事船田入道先見く古君義貞公
も勤りしりし朝家を背よ忍多うて權を足利氏も棄てりし
如斯ぢれば今徳壽君兵を揚多へんやう六且南山へ赴き征夷之將
軍の官を乞得く直ち河州の楠九刃の系地へ勅命を下し
兵を發せしむ足利氏兵を制せんとす隙も小相公左門五旗を
揚多り敵豈能我を討の力あらんや這時も丁を當り氷の血属也
臣の徒ハさうあり新田も志ある門へ招きさうも駈まると必定
此勢を將く要害の地は憑く兵を倣し糧食も執り猛種
たり一鼓して鎌倉を敵に執り乘じて京師を籠るいふ旗取
敵せんと利生明し其辨懸河のてく説られ各位遠理

腹急ぎ其籌策を行はして且莊浦も議せんとくを招
く昨宵の縁故より南山へ赴き車の一五十一を説り八郎をも
引合せられ莊浦も最終に衆意は同しき斯く后兵司夫婦
と己の女兒も命ひ幾分々の喜びをも倣り既も彼事九と
南山へ赴くべきも定りしうとも這回の旅行の敵國の中を凌行
あれは従僕を以て手は害わらん然とくも微くも打拵りて大
を討まも實しかるは勅許のほじ憚りてよるべし十清九濁
商議あるを安へ兵司の渾家とわをひ女のいづれを挿嘴
如家原四條中納言隆資卿も宮仕もれが此卿も馮心縁故を
説ふが如家もその人を知り多の警治も活きなる光景なり
疑りきまふられの事を倣得じとくも各々大も喜び這般の

便宜あらへ何ぞ心を煩ふべしと既に行装を整正しくもちてあり
 徳壽九子相従ふ們の兵司夫婦八郎と渾々四くやんく鄙人
 のそのりあぐする摸様み打おくるもちき都の空もぞ針ききき
 不在話下且説惠仲當より事ありと忽一介の禍み逢へき一件
 して生まれり爰も足利家累世の臣芳賀兵衛入道禪可と叫
 做的り前年不良の事ありと采邑宇都宮へ左遷るりし
 今日恩免を得て家眷を帯ひ京師に赴んとす這妻を止根児
 と叫ぶ男児一人を産み家を僥たるとして這兒今年十五歳と
 生得て此まき容貌ありと之も其器きりあしく小僧しく生平己の
 才を憑んが誇りたる人且貪利の癖あまても父母これを戒めず
 却て是を愛しりれば漸く其好智を増りたり然るも止根児

僥ちを生産の後孱弱才となり常には含るるとありし今
 同夫禪可の上京も伴りれ総川金原の驛に宿りり當時驛路
 の疲勞みやりり人暴れ痛發動して十も悩みりれば禪可大
 再尋るも慌忙客店の主翁を呼ぶ醫生を索りり主翁肯て
 猛一カ小囑付火速に惠仲を清まらじむも恰好惠仲永在り
 使カと得み来りれば主翁出むひ這般くの旅客病りと止根児
 が疾の惣界を説く禪可不引合まれば禪可鶏も遇止根児病
 疾を看せむと惠仲熱くこれを脛脈しくくらく此病は是言風
 と之も素も體孱症なれば疲勞大りして甚病のてくらわれ
 つらう五六貼の茶汁を服し多ひやが發汗して頓愈多しと
 猛藥劑してふへりれば禪可喜ひ謝し惠仲を飯らしり鬘



ホ子囁けり 投きも薬を前頻り妻も幼り母も心大汗を霑し
四更に左側へ至り五六分の快氣を得りしは禪可をたじり徒
者の們哉分々の意を易くし世を睡を催る折りしを料
や一個の偷兒ゆり世隙を窺ひ壁を穿ち既母裡へ忍入り
一箇の行李を奪ひ走らんとする腔竅は物に跌仆れば禪可這
響母起るま醒りこれを見視火速に枕上へ降りる腰刀を抜
裁はらぬは這賊一声呼と叫ん猛刃を奮い走り去禪可声を
放てやあら偷兒の入るぞと呼り母從僕をたじり客店の們各
母棍劈柴を持し駈来燭を照し見ると鮮血滴りしあくのそま
偷兒を見ざるは各跡を籠んとす禪可是を測りしは黒
夜恁去向を弁へ得べり人不如明朝と血のあとを索め往らむ

自ら妙とべしと止りれば奴僕亦是よりり天明を待たぬと曉
玉母ありしは客店の僕を前へ進すも禪可が從僕等血痕
の途を索行奉數町なるは只着松柏森と生茂なる下小
一座の柴門より血滴這裡へ入きりしは從僕も旅店の人へ對て
此何等の人の拙めやと問へ彼徒答く云是則昨宵小主母を
を奪りしは醫生惠仲が家なりと之へ從僕も云道理なる哉此
賊昨宵まかり小主母の病を着るるは其隊用光景を窺ひ
忍入るる疑はしやあら偷兒逃まきとと部署を定め將母
門の裡へ入りしは此時惠仲の昨宵禪可の旅籠より歸り後既
母睡母けきりしは四更半なる左側門を叩くものあり惠仲自
起出るとれを清くとす母一丈漢子身軀渾く鮮血を流

けりたり 彼漢子云らく 小急勢の事有り 此地をさるる事あり
 豈料や 數人の放擲馬車出會如斯 裁斗囊中の黄金悉く
 棄りれ 辛き命を捨ひ得る 之もかく 命の程もおぼは
 ぶき 兼く先生の名醫なるを 聞知るをい 高堂近けれ
 まら 治療を願ふ 先生憐れをたれ 治を下し 命や
 板地をへ 惠仲甚異 一思想いふ 刺光景を着る
 忍びむ 其創癥を着る 浅瘡也 要害むから 此の
 これを 縫く 上膏藥を施す 云 期月の中 喜怒哀樂を
 擅みする 戒あんとす 一箇の漢子 驕子をり
 一討の謝儀を呈し 感佩 一 小主 羽賊の
 爲 創を 先生治を乞へ 旨 陪從 僕回報 放 主箱の

迎奇先生を謝せん 爲 兼 一 陪小心 此をの 彼大漢子を
 扶伴ひ 辞 去り 惠仲 恠 呆然 在る
 うち 既 天明 たりし 鹽 激んと 戸を 閉 天色を 只
 聽 屋上 鳥鴉 高く 叫び 満身 肉跳 心驚 ぎられ 渾家 對て
 以ら 洒家 今朝 驚悸 才 裡肉 跳 知 針易 かつ 人へ
 ある 鳥 又 如斯 乱鳴 する 恠 禍 未 人 渾家
 云 這般 の 度 心 閉 今 時 春 乃 精 神
 動 故 心 驚 肉 跳 也 鳥 鴉 素 口 乃 時
 又 如 此 乱 鳴 する 渾 渾 奇 異 足 活 鏡 寸
 不 處 暴 門 外 閉 七 八 人 の 漢 子 一 閤 推 入 四 面 を 圍 い 音
 長 め き 漢 子 面 前 進 云 醫 賊 命 事 早 く 来

繪本壁落穂巻之二

二十一 舞臺

高田屋敷



世一衆星閣

高田屋敷



景仲
鳥啼
福ヤ
怪心

至し一言半句の不由に説残惡小惠仲を捉り引立去る迄
時五十態も外に往りて家裡小あはれを渾家と女兒のこころ
りる今如斯熱達々的小呆然とし是甚事の所以なり
分辯も只只啼りしころち臥りて泣き居る



